

出来事の回帰
——関係学的アプローチの方法論的試み——

**The return of the Event:
a methodological essay on the approach of
Relational Studies**

稲永 祐介

東京外国語大学 世界言語社会教育センター

INENAGA Yusuke

World Language and Society Education Centre, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. 「国際関係の社会学」と「関係的事実」
 2. アクターと相互依存 —— 「危機のグローバル関係学」との比較から
 3. 出来事に埋め込まれた関係性とフィギュレーション —— 近代国家の出現
- おわりに

キーワード：歴史分析、国際関係論、フランス社会学理論、国家、関係性の圧力、ノルベルト・エリアス
Keywords: historical analysis, international relations, sociological theory in France, State, relationships pressure, Norbert Elias



本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

要旨

本稿は、出来事の背後で見えにくい関係性の歴史的な蓄積を分析する方法を考察し、その知見から関係学的なアプローチの利点を論じる。そのために本稿が取り上げるのが、ノルベルト・エリアスの歴史分析である。まず、日本ではあまり知られていないフランスの「国際関係の社会学」へのエリアス社会学の影響を検討し、方法論的な視座を抽出した後、新学術領域「危機のグローバル関係学」と比較し、両者の特徴を明らかにする。次に、「国際関係の社会学」が導入する「関係的事実」を分析する方法の系譜をエリアスの歴史分析にたどり、理論的に検討する。その事例は、1682年にルイ14世がベルサイユに宮廷を移した「ビックイベント」である。ここでは、この出来事に埋め込まれた「相互依存の編み合わせ」が市民社会や国際秩序の権力関係の仕組みとしてパターン化される方法論的な視座を、批判的に検討する。最後に、中央集権的で効率的な近代国家を自明視することなく、時代状況に応じた国家権力との対し方から「グローバルな危機」を探究する分析視角を提案する。

Abstract

This paper aims at finding out how to analyze the historical accumulation of “relationships” behind events that are difficult to apprehend. This article then attempts to discuss the benefits of relational studies’ approach from its research. To this end, this paper refers to Norbert Elias’s historical analysis. We will first examine the influence of Eliasian sociology in France “Sociology of International Relations”, which is not well known in Japan. Then we try to extract a methodological perspective out of it and compare those perspectives with Scientific Research on Innovation Areas—“Relational Studies on Global Crisis”—to clarify characteristics of both. Then, we retrace the genealogy of the method of analyzing “relational facts” introduced by “Sociology of International Relations” from Elias’s historical analysis and theoretically examine the genealogy. We will mobilize the example of the “Big Event”, when Louis XIVth moved the siege of power to Versailles in 1682: it created a pattern of relationships inside the civil society and the international community. It appears as a mechanism of power relationships. We will critically examine the methodological perspective that the “figuration of interdependence” embedded in this conjunctural event created a pattern of “relationships”. We finally propose a shift in the perspective of exploring the “Global Crisis”, from the perspective of how to deal with the State power that depends on different phases, without acknowledging a self-affirming centralized and efficient Modern State.

はじめに

本稿は、出来事の背後で見えにくい関係性の歴史的な蓄積を分析する方法を考察し、その知見から関係学的なアプローチへの視点転換を提案することを目的にする。そのために本稿が取り上げるのが、ノルベルト・エリアスの歴史分析の国際関係論への理論的な影響と方法論的視座である¹⁾。

エリアスの仕事は、「関係社会学」に方法論的な影響を与え、その理論的貢献は国際関係論にまで及ぶ。社会学は、本来的に因果関係であれ、アクターの存在様式や行動であれ、諸個人や集団の様々な関係性を問うのだが、国際関係論において関係性への分析視角が権力に向けられるとき、どのような視座から権力関係のパターンが抽出されるのかという問題が提起される。国際関係の研究にとって、関係学的なアプローチが開拓しようとしている出来事への新しい視座がどのような新しい地平を切り開くものであるかについて考えることは、重要な意義があるといえよう。

はじめに、出来事について概観しておきたい。一般に出来事は、世間で起きる様々な事柄を指すが、日常で生じる普通なことや新奇で人目を惹くこと、そして社会変動をもたらす決定的な事件をも含む [Ozouf-Marignier et Verdier 2000: 220-222, Suter 1997]。当事者が限定される事件がいったん生じると、突発的に人びとを巻き込み、いつの間にか自分が置かれている現実となることがある。革命のような出来事もあれば、セキュリティを脅かすような暴力が反復して広範に語られることで出来事として我われの視野に入る場合もある。さらに暴力は、範囲や規模の違いがあるとはいえ、戦争や紛争のような世界各地で繰り返される国際的な事象として現れることもあれば、2014年から西ヨーロッパで続発したテロリズムのように、社会生活に予想外の形で現れる事象もある。しかもグローバル化した社会の出来事は、国民国家の枠内で完結することなく、国境を越えて波及し、人びとを巻き込むことさえある。我われは、このような出来事の背後にあって理解されないでいる関係性をどのように捉えることができるのだろうか。

フランスでは、狭義の実証史学が考察してきた出来事は、時間的な前後関係に単線的な因果関係を想定していた。しかし、出来事を分析する場合、事実を確定して因果関係を叙述するだけでは、特殊個別的な結果を示すだけで科学の対象になりにくい。この狭義の実証史学とは違って、デュルケーム学派とアナル学派は、出来事の発生によって深層から浮かびあがるもの——集合意識や集合的記憶、心性——を研究した。彼らの方法は、事件中心的な発想を批判しながら、出来事が現実を示し、現実が我われの想像力によって整理され意味づけられる構造に視点の比重を移した。この学問的な潮流は、「出来事の回帰」と呼ばれる [Nora 1974, Doss 2010: 56-66]。しかし、社会科学の歴史分析が諸事実の絡み合いから生じる様々な社会生活のまとまり方を解明しようとするとき、この方法論的な視座には、因果関係とは別の単線的で不可

逆的な民主化や統合のプロセスと合致するか否かの基準で出来事を配置し、評価する傾向があるのではないか。

このような問題設定から本稿は、第一節では、フランスの「国際関係の社会学」に与えたエリヤス社会学の方法論的な影響を考察し、この学問分野が関心を向ける「関係的事実」を検討する。第二節では、新学術領域「危機のグローバル関係学」の関係学的アプローチを「国際関係の社会学」の方法と比較し、この二つの学問分野が設ける分析の射程を論じる。第三節は、前節の考察から抽出される関係性の概念を、通時的で錯綜した出来事から考察する。その事例は、エリヤスが「習俗の文明化」——『文明化の過程』(上)の仏語タイトル——で論じた、ルイ14世が1682年に宮廷をベルサイユに移した「ビックイベント」である。おわりにでは、関係性への分析視角の転換が「危機のグローバル関係学」の方法論的な利点として総括される。

1. 「国際関係の社会学」と「関係的事実」

本論に入る前に、エリヤスをフランスの研究動向に引きつけながら簡単に紹介しておきたい。エリヤスは、ドイツ系の社会学者として知られ、その主著『文明化の過程』が1969年にフランスで刊行された後、多くの著書が90年代に翻訳刊行された。フランスのエリヤス社会学の受容は多岐にわたる。社会学と歴史学では、ピエール・ブルデューとロジェ・シュルチエがエリヤスの仕事をやや過大に評価したことで知られており [Gordon 2002, Le Roy Ladurie 1997]、政治社会学では、レイモン・アロンが国家の歴史社会学の観点からエリヤスの方法に注目し、書簡で交流したことが著名である [Joly 2012: 186-187, Joly and Delurmoz 2012]。その一方、エリヤスの社会学に単線的な社会進化論を見い出し、彼のヨーロッパ中心主義的なアプローチを批判する傾向も根強い [Mennell 1992]。

さて、このエリヤスの仕事であるが、これまで国際関係論で扱われることはほとんどなかった。その理由には、エリヤス自身が明示的なかたちで国際関係を論じなかったことが挙げられる [Devin 1995]。しかし、エリヤスの研究は、社会学の分野では、グローバリゼーションの観点から論じられ [Mennell 1990]、R・ロバートソンは、「急速に増大するグローバルな相互依存関係ともろもろの国際関係の流動性および多極性」を、エリヤスが論じる「自己抑制の内面化」に着目して考察した [ロバートソン 1997 (1992): 174]。彼は、エリヤスが探究する諸個人の文明化のプロセスと、大国が所有する核兵器や集団破壊兵器の使用を抑制する理想を、アクターたちが和平をめざす「道徳的感覚」の問題として把握する。さらにフランスでは、政治学者のドゥヴァンが「国際関係の社会学」においてエリヤスの方法を、歴史的な脈から「関係的事実」を分析する手法として国際関係論に積極的に導入した [Devin 2018, 2019: 77-82]。ここでいう関係的事実とは、コミュニケーション手段や人の移動の増加、技術革新による接触の多様化などを経て様々なア

クターたちが相互に関わる事実を指す。本節は、フランスの「国際関係の社会学」がリアリズムと相互依存論の二元論を乗り越えようとする、ヨーロッパ秩序や国際秩序を理論づける視座を考察する。

フランスでは、国際関係に関心を向ける社会的な研究は比較的新しい。これまで国際関係を学術的なテーマとして扱った学問領域は、歴史学と法学であった。歴史学者は国際関係を出来事として捉え、他方の法学者は国際関係を規範の問題として考察した。この二つの伝統的な学問的潮流に対して、政治学者が独自の方法で国際関係を社会的な研究の対象とするには、国際的な事象を「社会事象」として認識し、国際関係の関係性が問われなければならなかった。

フランスにおいて社会事象という捉え方は、デュルケム以来の社会学の伝統的傾向に沿って事実を分析することを意味する。この学問傾向には、ある一定の領域のなかでアクターたちがどのように結びついているのかという秩序への問題関心がある。したがって、フランスの「国際関係の社会学」が捉える国際的な事象とは、国際関係における行為主体を個人のように見なし、主体間の紛争や協力が複雑に絡み合う秩序のなかで発生する現象である。ここでいう行為主体には、国家や超国家的アクター(国際機関や国際連合、その他の国際組織、グローバル企業、民間団体など)だけでなく、主権国家の領域内に暮らす市民(必ずしも国籍が同じではない)や、例えば、クルド人のようにいくつもの国境に分断されたエスニシティに代表される不定形な非国家的なネットワークを持つ人間集団も含まれる。

そのうえでフランスの「国際関係の社会学」は、出来事をアクターたちの実践や組織から成るテーマに整理し、客観的でかつ関係的な事実から考察する [Devin 2019]。質的な分析方法には、社会史的な調査法が用いられるが、その研究関心は、あくまで社会変動の事象であり、社会変動をめぐる論争や思想ではない。こうした「国際関係の社会学」の分析視角は、それぞれのアクターが紛争状態に陥っても、当事者たちが必ず避ける危機、いわば互いの存在基盤である長い期間にわたってほとんど変化しない関係構造の危機に向けられている。

2. アクターと相互依存 ——「危機のグローバル関係学」との比較から

フランスの「国際関係の社会学」と「危機のグローバル関係学」の方法を比較すると、二つの関係学的アプローチの視座が明らかになる。

まず簡単に「危機のグローバル関係学」に触れておきたい。この新学術領域は、国際政治の舞台上でセキュリティや秩序を脅かす出来事を把握し分析する。しかし、その際に「グローバル関係学」が分析するのは、先進欧米諸国が関わり、メディアが働きかけてはじめて「見えてくる」出来事の因果関係や実態ではない。その分析の対象は、出来事の背景にある関係性である。しかも「危機のグローバル関係学」には、国際的な事象を様々なプロセスが交錯して生

じる出来事と見なすだけでなく、出来事に意図的に関与したアクターを特定することをあえて避ける特徴がある。それは、「危機のグローバル関係学」のねらいが主体を中心にして出来事を考察するのではなく、関係を中心にして出来事の深層を理解し、新しいグローバルな危機を解明することにあるからである(酒井 2018)。

このような「危機のグローバル関係学」の方法は、フランスの「国際関係の社会学」が紛争におけるアクターを名指したうえで、国家や国際機関、エスニシティという従来型の主体間の相互作用やその様態を関係的事実から明らかにしようとする方法から一線を画している。この意味で「危機のグローバル関係学」は、アクターの非対称性を等閑視しがちな「国際関係の社会学」の分析視角とは違って、多義的で不定形なアクターの予測不可能な動きや、危機のミクロからマクロにいたるまでの多様なアクターたちが連動した通時的で錯綜した関係性²⁾を分析する視座において優れている(松永 2018)。

しかし他方で、フランスの「国際関係の社会学」が関係性の概念を二つに分け、関係性の様態により踏み込んだ理論的な考察を試みることは注目に値する。その一つは、アクター間の相互作用である。ドゥヴァンによれば、相互作用とは、アクターたちがそれぞれ自律的で、相手に影響する力を持つ競争的な関係である。その具体的な例として商業関係が挙げられる。経済的なアクターが販売ルート全体として把握し、お互いが熟知したルールや戦略に従って双方向から競争する場合である。彼によれば、商業化のプロセスにおいて、競争力の弱いアクターがある特定のセクターにおいて吸収されるか、あるいは排除されたとき、そのセクターは、相対的に強いアクターに独占され、アクター間に新しい関係性が生じ、セクター全体が活性化するという [Devin 2018: 315]。もう一つの関係性概念は相互依存である。「国際関係の社会学」は、レイモン・ブードンの社会学理論 [Boudon 1979] を導入し、相互依存を、個々の行為が集積されることで、アクターたちが全体としてまとまる凝集的な関係と定義する。ドゥヴァンは、この相互依存を、全体としての社会集団が常に変化し、複雑に絡み合う関係の様態として捉え、必然性に応じて変容し発展する関係性に着目して論じる [Devin 2018: 306]。彼によれば、こうしたアクターを包摂する「関係の編み合わせ」は、戦争と平和の分岐点となる紛争状態において、潜在的な敵対国の武力行使を思いとどまらせる暴力の抑止として働く——集団からの逸脱の防止機能。

フランスの「国際関係の社会学」が方法論的に精緻化した二つの関係性の概念——しかし、相互作用と相互依存の関係においては、行為主体が同等であるという想定がある——は、アクターの役割と形態、紛争、支配構造、連帯のあり方、社会化を分析するために有用である。とりわけ、アクター自身やアクターたちが共存しうる関係構造をパターン化し、秩序のなかでアクターらがどのように振る舞い、いかに規律づけられるのかという統治のテクノロジーを、国家内の諸関係と国家間の諸関係がそれぞれ違う次元で絡み合うプロセス [Devin 1995: 315-316] から分析

する方法として優れている。しかし、この「国際関係の社会学」が、集団として生き延びる生存競争の必然性の観点から統合を問うとき、この方法論的な視座は、統合がもたらす諸問題を相互依存の副次的な現象として放置し、本稿のはじめに示した社会科学の歴史分析の難題——単線的で不可逆的な民主化や統合の価値基準——を抱えたままである。はたして、様々な個人がネーションとしてまとまり、さらにその延長として主権国家が互いに依存しながら共存するという「関係の編み合わせ」は、必然なのだろうか。必然であるとすれば、どのような関係性において発展するのであろうか。

次節は、エリアスが「西洋のダイナミズム」——『文明化の過程』(下)の仏語タイトル——に見出した「ビックイベント」を事例にし、出来事に埋め込まれた関係性を検討する。この考察によって、出来事を分析する方法論的な視座が作業仮説として提案される。

3. 出来事に埋め込まれた関係性とフィギュレーション——近代国家の出現

エリアスが、近代国家の形成において、歴史的な「ビックイベント」として見出したのが、1682年の「太陽王」ルイ14世が宮廷をベルサイユに移動させ定住した出来事であった³⁾。エリアスがこの出来事を論じるとき、彼が関心を向けたのは、暴力が兵舎に閉じ込められ、国家の中心で管理されていく覇権闘争ではなく、アクターたちの暴力が自己抑制されていくプロセスとその結果としての関係の編み合わせ——フィギュレーション——であった。この点でエリアスの社会学理論には、常備軍と徴税機構が互に関連する仕組みとして制度化され、戦争を繰り返す実行することで徐々に近代国家が構築されたと論じるティリー [Tilly 1992: 56, 277-282] の歴史分析とは異なり、アクターたちが権力をめぐって競争し互いに支え合う関係性から近代国家の形成を分析する方法論的な視座に特徴がある [エリアス 1970]。関係学的アプローチの観点からいえば、エリアスの分析視角は、国王の身体が地理的に移動するという出来事に埋め込まれた関係性の圧力に向けられている。

エリアスは、独特な相互依存関係を備えた権力の体系を中世からの長期的なプロセスの帰結として、次のように並行する二つの「国家建設」と「社会の中央集権化」から論じた。

行動様式の文明化とそれに即応する人間の意識および衝動状態の改変は、国家の建設過程ならびにそのなかで絶えず進められる社会の中央集権化に同時に目を継ぐのでなければ理解できない [エリアス 1978b: 10]。

エリアスの関係学的なアプローチは、個人の衝動や感情が制御されていく、心性や習俗の長期的な変化を、暴力が独占され正統に行使される統治機構の構築と密接に関連した統合のダイナ

ミズムの結果として捉える。そのうえ彼は、関係の編み合わせが持続的に変容し流動する動きを見落とさない。

これまでエリアスの歴史分析は、国家形成と自己規律化をめぐる近代化論として社会科学で広く受容されてきた。彼が着目する自己制御を強いる関係性の圧力を論じるにあたって、ここで彼が考察したフランスの事例を二つの観点から概観しておきたい。一つは、諸個人が集団という生存単位にまとまる統合のプロセスである。エリアスによれば、諸個人は、生き延びるために物理的な強制手段や財源を中心に集め、制度化し、その一方で緊張を緩める家族に集い、そして部族やネイションに結集していく。彼は、このプロセスを国家形成の基本原則として暴力手段と資本の集中に見出した。領主は、領土を奪い合う戦争に勝利したあと、家臣や領民が住むより大きな領土を支配し、その中心に宮廷を築く。その後も宮廷の勢力は、戦いが繰り返されるたびに拡大し、暴力手段を独占しつつ、中心に富や名誉、権力を集中させていく。フランスは、数多くの戦争の結果、1532年にはいまの国土の大半が一つの支配単位としてまとまった[エリアス 1978b: 233-240]。この国家形成において貴族層は、徐々に権力を求めて中心=国王に集まり、宮廷の働きを分担して運営するようになる。しかし、これだけであればエリアスの考察は、トクヴィルやヴェーバーが考察した政治と行政の中央集権化のプロセスとさほど変わらない。

関係学的方法論から見て、エリアスの歴史分析が興味深いのは、もう一つのプロセス、すなわち、アクターたちが情動を自己抑制するプロセスである。彼は、国王の転居という「ビックイベント」を考察する際にユニークな方法論的な視座を示している。彼は、覇権による独占の法則に加えて、アクターたちの様々な行動が集積することで出来事が生じる関係的事実に、歴史的な必然性を見出した。メンバーの数が多ければ多いほど、相互の交流が活発になり、アクターたちの勝手な行為を引き留める集会的な力が増していく。この人間集団のロジックにエリアスは、権力をめざす者たちが物理的な強制手段や財源を独占していくという無慈悲な合理性に基づく法則だけではない、集団内の相互依存のコードを探り当てた。そして彼は、物理的な強制力とは違う心理的な強制力が関係性に生じると論じたのであった[エリアス1978b: 334-335]。彼において、この互いが依存し合う行為の編み合わせが、絶対王政の構築を告げる「ビックイベント」の背後で見えにくい関係性である。しかもこの相互依存関係の定着は、特権者たちの当初の目的に全く含まれていない意図せざる結果でもあった。

したがってエリアスによれば、特権者たちは、「個々の人間それぞれの計画や行動、感情的な心の動き、合理的な心の動きは絶えず親しみをもってかあるいは憎しみをもってお互いに編み合わされる」ゆえに、宮廷に特有な相互依存の関係のなか、たえず他人の思惑に注意を払い、同時に時々の状況に応じて、自分の衝動や感情を抑制することが強制され、徐々に自分の衝動や行動を自己制御することに慣れるようになる⁴⁾。しかも、このような集団内の不可避な行動規範

に従う個々の行為は、たとえ国王であっても例外なく、自らの地位を維持するために他者——国王の場合、特権者である貴族たち、あるいは議会——との均衡を維持しなければならない。エリアスに従えば、国王の権威が威力を持ち始めるのは、宮廷で緊張状態にある国王と貴族の相互依存が、双方向の関係を越えた臣民全体との権力関係へと広がったからであった——国王の身体に想像される支配の正統性。

このタイプの権力体系では、たとえ絶対君主政の国王であっても、フランスを支配し、そしてヨーロッパに君臨しようとする主体性は限定される。なぜなら、諸個人の結集と自己抑制の内面化には明確な境界がないゆえに、諸個人がフランス国という人間集団の生存単位にまとまる統合のプロセスと、自己抑制のプロセスの二つが一定の領域内で交錯すれば、国王といえども他の成員たちと同様にフィギュレーションのなかに配置されるからである。関係学のアプローチからいえば、主権は、ルイ14世という個人の人格にあるのではなく、国王の身体の周りに群がり恍惚や羞恥心を感じる人びとの活動範囲——相互依存の編み合わせ——の外枠と、権力が作用する範囲の境界が重なり構築される国家の勢力圏の中心にあるといえよう。やや本質主義的であるが、諸個人を自己管理や自己統制へと導く相互依存のプロセスがエリアスにとって歴史の必然であった[エリアス 1978b:334-335]。この関係を洗練し強める諸個人の競争と相互依存の発展過程こそが意図せざる結果として近代国家をもたらしたのであった。

おわりに

本稿を終えるにあたって、権力関係のパターンを抽出する際に注意すべき問題点を指摘したい。それは、政治学者による統合のダイナミズムに潜む同化主義への理論的な後付けである。フランスの「国際関係の社会学」は、エリアスが論じるフィギュレーションを踏襲したことにより、宮廷に見られたような関係性の圧力を、社会的に制度化された仕組みとしてパターン化し、アクターが存立する関係構造に意味づけを与えた。けれども、国際関係論では、国際競争や国際協調などのマクロレベルの出来事は、国際秩序を構成する主権国家の選好や行動に還元されて説明される傾向にあり、相互依存の関係性の圧力がネイションのような諸個人の政治的集合からEUのような諸国家の地域的集合へ、そして国連のような超国家的な秩序として同心円的に展開する秩序原理としてコード化されるとき、我われは、この秩序原理に、アクターたちが習得すべきある特定の規範が埋め込まれていることを見逃すべきではない。なぜならば、相互依存の関係性は、すぐに習得することが困難な礼儀作法や節度、しぐさや社交のエチケットなどのあいまいな基準を用いることによって、「よそ者」を切り分ける指標となりうるからである。特定の文化規範や社交性——近代国家が出現した西ヨーロッパで通用する振る舞いや感情表現の価値基準——を共有していないアクターたちは、他者との競争や協調が求められるとき、関係

の編み合わせから恣意的に排除されるか、たとえ関係を結んだとしても公平には扱われず、劣位に置かれるだろう。フランスの「国際関係の社会学」の方法論的な視座がヨーロッパ中心主義の認識論的な図式を引きずっているとすれば、この関係学的方法論的アプローチでは、社会的・政治的な公正や平等といったヒューマニティの現代的な争点は放置されてしまうのではないか。

他方、「危機のグローバル関係学」には、ひかえ目に言っても、関係を中心にして世界の出来事を考察することで主権国家に囚われた我われのまなごしを引き離し、権力の仕掛けを分析する利点がある。このグローバル関係学のアプローチによって我われは、国家の他に危機に取り組むアクターがないように見えるときでも、統治権力を構成し執行する国家のロジックを追究し、権力関係を批判的に把握することができるだろう。しかもそれは、事実から具体的な社会事象を探究することによって、いまの民主化や統合のプロセスの方向性を見定めることにもなるのではないか。しかしながら、アクターの総和を越えた関係の編み合わせばかりに目を奪われてしまうと、今度は、錯綜する関係性が実体化されてしまう。それでは自由自在に自分で選べる事情のもとではないとしても、出来事を引き起こすことのできる人間へのまなごしが後退するだろう。この点に注意しながら我われは、中央集権的で効率的な国家を自明視せずに、「グローバルな危機」を時代状況に応じた統治権力との対し方から分析する関係学的方法論的視座への転換が求められるのである。

註

- 1) 本稿は、筆者が研究協力者として参加する新学術領域研究（研究領域提案型）「国家と制度：固定化された関係性」（代表：松永泰行）の研究活動の一環として報告した研究発表の一部に加筆修正したものである（第3回若手研究者報告会、新学術領域研究「グローバル関係学」、千葉大学、2019年12月21日）。会場では、討論者の石田憲氏と前掲共同研究の代表者、松永泰行氏から貴重なコメントをいただいた。この場を借りて謝意を申し上げたい。
- 2) このようなアクターの非対称性の具体的事例として、2015年からフランスで発生した一連の「ホームグロウン型テロリズム」を挙げることができる。関係学的方法論的アプローチは、これらのテロ事件を、グローバル化のなかで様々な関係が錯綜した出来事として分析することができるだろう。
- 3) 1682年のベルサイユの出来事は、宮廷での特権者たちの振る舞いの一つひとつをスペクタクルにした。本稿の考察の射程からは外れるが、メディアと権力の関係から出来事を考察すると、出来事には、人間の活動空間の深層にある問題をスペクタクルとして投影し、その事象が現実なのか虚構なのか定かではないとしても、生き生きとした感覚とともに知覚させる仕組みがあることがわかる [Morin 1972]。
- 4) ここでエリアスが把握する相互依存の拘束は、まるで何者かに自動制御されているかのようである。デショは、相互依存を形成するプロセス自体に「相対的な自律性」があるというエリアスの見解を批判し、相互依存の関係も権力に操作されると主張する [Déchaux 1995: 307]。さらに彼は、相互依存が行為者の合理的思考を混乱させ、自由な意志を締めつけるというアードンの見解に依拠し、相互依存の関係にあることがアクターの行為を合理的にするというエリアスの認識論的立場を批判的に論じる [Déchaux 1995: 311]。

参考文献

- 松永泰行 2018 「重層的文脈重視型「グローバル関係学」の視座:その確率のための予備的議論」『新学術領域「グローバル関係学」オンライン・ペーパー・シリーズ』第1号
http://www.shd.chiba-u.jp/gblcrss/online_papers/onlinepaper20180917.pdf
- 酒井啓子 2018 「「グローバル関係学」試論:「グローバルな危機」分析のための関係学を模索する」(『新学術領域「グローバル関係学」オンライン・ペーパー・シリーズ』第1号
http://www.shd.chiba-u.jp/gblcrss/online_papers/onlinepaper20180520.pdf
- Boudon, Raymond 1979, *La logique du social*, Paris, Hachette.
- Déchaux, Jean-Hugues 1995, « Sur le concept de configuration : quelques failles dans la sociologie de Norbert Elias », in *Cahiers internationaux de Sociologie*, Vol. 99, pp. 293-313.
- Delmotte, Florence 2007, *Norbert Elias : la Civilisation et l'Etat. Enjeux épistémologiques et politique d'une sociologie historique*, Bruxelles, Editions de l'Université de Bruxelles.
- Déloye, Yves 2018, « Les Etats modernes piliers de l'ordre international ? », in Bertrand Badie et Dominique Vidal (sous la dir.), *Qui gouverne le monde ?*, Paris, La Découverte, pp. 72-84.
- Delzescaux, Sabline 2016, *Norbert Elias. Distinction, conscience et violence*, Paris, Armand Colin.
- Devin, Guillaume 1995, « Norbert Elias et l'analyse des relations internationales », in *Revue française de science politiques*, 45-2, pp. 305-327.
- 2018, *Sociologie des relations internationales*, Paris, La Découverte.
- 2019, *Les organisations internationales*, Paris, Armand Colin.
- Dunning, Eric and Jason Hughes 2013, *Norbert Elias and Modern Sociology. Knowledge, Interdependence, Power, Process*, London, Bloomsbury.
- Dosse, François 2010, *Renaissance de l'événement. Un défi pour l'historien: entre sphinx et phénix*, Paris, PUF.
- Elias, Norbert 1969a, *Über den prozess der zivilisation*. 赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳『文明化の過程(上)』法政大学出版会、1978年 a
- 1969b, *Über den prozess der zivilisation*. 波田節夫・溝辺敬一・羽田洋・藤平浩之訳『文明化の過程(下)』法政大学出版会、1978年 b
- 1970, *Was ist soziologie ?* 徳安彰訳『社会学とは何か』法政大学出版会、1994年
- Gordon, Daniel 2002, “The Canonization of Norbert Elias in France: A Critical Perspective”, in *French Politics, Culture & Society*, Vol. 20, n°1, Spring 2002, pp. 68-94.
- Joly, Marc 2012, « Dynamique de champ et «événements»: le projet intellectuel de Norbert Elias », in Quentin Deluermoz (sous la dir.), *Norbert Elias et le XX^e siècle. Le processus de civilisation à l'épreuve*, Paris, Perrin, pp. 163-200.
- Joly, Marc et Quentin Deluermoz 2012, « Un échange de lettre entre Raymond Aron et Norbert Elias (Juillet 1939) », *ibid*, pp. 201-212.
- Morin, Edgar 1972, « Le retour de l'événement », in *Communications*, n°18, pp. 6-20.
- Mennell, Stephen 1990, “The Globalization of Human Society as a Very Long-term Social Process : Elias's Theory”, in Mike Featherstone (ed), *Global Culture: Nationalism, Globalization and Modernity*, London, SAGE, pp. 359-371.
- 1992, *Norbert Elias. An Introduction*, Oxford, Blackwell.

- Le Roy Ladurie, Emanuel 1997, « Sur Norbert Elias », in *Saint-Simon, ou, Le système de la cour*, Paris, Fayard, pp. 515-520.
- Nora, Pierre 1974, « Le retour de l'événement », in Jacques Le Goff et Pierre Nora (sous la dir.), *Faire de l'histoire*, Paris, Gallimard, pp. 283-306.
- Ozouf-Marignier, Marie-Vic et Nicolas Verdier 2000, « L'événement : un objet historique à emprunter », in *Espace géographique*, tome 29, n°3, pp. 218-223.
- Robertson, Roland 1992, « "Civilization," Civility and the Civilizing Process: "Civilization and the civilizing process: Elias, Globalization Theory and analytic synthesis" », in *Theory, Culture & Society*, 9(1). 「文明」、文明性、文明化の過程」『グローバリゼーション 地球文化の社会理論』東京大学出版会、pp.163-191、1997年
- Suter, Andreas 1997, « Histoire sociale et événements historiques. Pour une nouvelle approche », in *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, 52^e année, n°3, pp. 543-567.
- Tilly, Charles 1992, *Contrainte et capital dans la formation de l'Europe 990 – 1990*, Paris, Aubier.

【付記】本稿は、科学研究費補助金 [課題番号 16H06547] の助成による研究成果の一部である。